会 議・視 察 報 告

「第９回北東アジア国際観光フォーラム・韓国金泉会議」報告
新たな北東アジア地域間の国際観光協力に向けて

ERINA 特別研究員　鈴木伸作

国際観光の振興と北東アジア地域間の協力と連携に向けての国際会議である「第９回北東アジア国際観光フォーラム」（International Forum of Northeast Asian Tourism、略称IFNAT）が、2013年８月21日から22日に韓国の金泉市で開催された。以下に概要を報告する。

⑴北東アジア国際観光フォーラムについて

この会議は、2002年に日中の観光学研究者にERINAが協力する形で発足した「日中共同観光会議」が母体となり、日中両国の官民の観光関係者が共同研究や連携を深める中、中国社会科学院旅遊研究センターの支援により2004年に日本、中国、韓国の３カ国の参加により大連市で第１回フォーラムが開催された。その後、モンゴル、ロシアの２カ国が加わり参加５カ国による行政、大学、研究機関、旅行･運輸業者などの幅広い会議へと発展していった。これまでに、大邱市（韓国）、新潟市、束草市（韓国）、ウランバートル市（モンゴル）、ハバロフスク市、新潟市、全州市（韓国）と参加国持ち回りで開催され、産官学から幅広い参加者を得て一定の成果を上げている。既に参加５カ国を一巡し、韓国開催は今回で４回目となる。内容には、開催地の希望テーマも取り上げられ、国際観光についてのより具体的な提言と連携事業、会議運営のあり方など、実質的な議論が求められる会議となった。

このフォーラムの根底に流れるのは、「北東アジアを平和で繁栄した地域にしていくためには、国境を越えた交流の促進が重要であり、中でも観光関係者が協力関係を強化し、連携のもとに観光戦略を共同で策定し、実行すること」の意識である。

⑵第９回IFNAT金泉会議報告（概要）

今回の金泉会議は「北東アジア国際観光学術会議2013」として、「東北アジア国際観光フォーラム」と「東北アジア観光学会」の共同主催で、開催地の慶尚北道庁、金泉市庁、韓国観光公社、金泉大学などが協賛し開催された。

参加者は、韓国、日本、中国、モンゴルの４カ国から行政、大学･研究機関、観光旅行会社、農業経営者、輸送業、学生、市民など約450名で、金泉市芸術会館を主会場に、地元金泉大学キャンパスを会場に開催された。

会議の共通テーマは「農村体験観光の活性化を目指して」、サブテーマを「北東アジア地域の国際観光の振興と連携について」、「北東アジアの文化、ビジネス、経済交流の強化」とし、「北東アジア地域の観光振興と協力、観光ネットワークの構築」を中心に各国代表による基調報告や参加者による意見発表と討論がなされた。

この会議には、日韓両国の学生による論文発表大会も併せて開催され、多くの学生が参加した。

最終日にはIFNAT委員会は会議を総括した宣言文を提案し了承された。

今年は、昨年の韓国全州市の会議と同様に「第９回北東アジア国際観光フォーラム」と「第７回東北アジア観光学会金泉会議」の２つが合同で開催されたが、「東北アジア観光学会」は、日本と韓国の観光学の研究者･大学の先生を中心に、研究発表の場として第２回IFNAT大邱会議の参加者によって創設されたものである。

会議１日目の午前中には、合同開会式と参加国代表による基調講演が行われた。

（開会式）

開会式では金泉市長の歓迎の挨拶、東北アジア観光学会金光根会長、IFNAT日本委員会小島隆会長が主催者・共催者として挨拶を述べた。

また、日本政府の派遣として国土交通省北陸信越運輸局企画観光部国際課から加藤貴広第２係長が出席し、開会式で日本政府を代表として祝辞を述べた事は、画期的な出来事であり大きな意義があった。これまで海外で開催されるフォーラムには、各国駐在の日本大使館や領事館代表が出席していたが、本国の日本政府関係者からの出席はなく、今回、IFNAT関係者からの要請でようやく実現した。これも日本政府が推し進めているビジットジャパン事業を中心とする国際観光振興策の海外からの観光客誘致の重要性と、積極的なプロモーションの現れと、大いに評価したい。

（基調講演）

基調講演には、設立当初から会議を牽引してきた中国社会科学院旅遊研究センターの張広端主任が「言語は文化交流のための重要なツール」と題して講演した。張氏は、北東アジア地域間における文化交流の壁は多様な言語だが、言葉はコミュニケーションのツールであり、文化交流のドアを開くキーであることや、国際観光など地域間交流に大きな役割を果す言語教育の重要性について強調した。

また、日本代表として、新潟県で初めての観光カリスマである矢野学新潟県議会議員が「田舎体験観光を通じた交流人口の拡大」をテーマに講演した。新潟県上越市にある雪だるま財団の活動を中心に、夏場の集客対策として、農村の持つ自然、棚田、地域伝統技術、郷土料理などを商品とした、都会に住む子供たちへの「田舎体験型観光」事業について実例報告された。この田舎体験の特徴は、体験舞台が棚田や生産現場であり、そこに住む人々のあるがままの生活や姿を伝えたことで、先進的な教育旅行として、多くの学校･生徒の受け入れに成功している事例が報告され、韓国聴講者の方から反響があった。

また、特別ゲストとして北九州市観光部の鮎川典明部長から「北九州市の観光政策・産業観光」と題して、地元産業を観光素材として生かしている自治体の観光政策の実例紹介があった。

（IFNAT会議）

韓国、日本、モンゴル、中国が出席し、「北東アジアにおける農業観光と協力の重要性」、「日本、韓国、中国における農村観光の未来」「モンゴルにおける農村観光の概念と実態」、「持続的な観光プロモーション」「日本酒と観光」「中国地方都市のための観光アクションプラン」など、北東アジア地域おける国際観光振興への取り組みと地域間協力の可能性と重要性などについて、12名（日本から５名）の発表と提言があった。

発表毎に司会者からのコメントと、出席者同志の意見交換などが行われたが、時間的制限から十分な意見交換の時間がなかったことや、発表者が主に大学の先生や研究者で、観光業者からの実践的な発表が少なかったことが残念であった。

また、各国の発表者の国際観光に対する地域性と意識の相違が散見されたが、地域間観光交流の重要性と未来志向については、ベクトルの方向が同じだと強く感じられた。

（東北アジア観光学会会議）

「農村と国際観光」、「農村と地域振興計画」、「観光の発展振興について」の３セッションに分かれて発表があり、日韓の大学の先生や研究者29名（うち日本側９名）が発表した。

日本からは、四天王寺大学、長崎大学、大阪大学、和歌山大学等６大学、韓国からは大邱大学、釜山大学、南海大学、安東大学など10大学が参加し、日頃の研究成果を発表し盛会であった。

（学生発表会）

韓国語、共通語〔英語〕、日本語の３セッションの言語別に開催され、日本からは立命館大学、阪南大学、中央大学、近畿大学、和歌山大学など７大学、韓国からは先の10大学から参加した。発表は個人、グループ形式で行われ、韓国学生40名、日本学生56名が発表し、参加者にはそれぞれ参加証が交付された。

閉会式を兼ねた歓迎夕食会では、学生たちが賞状を手に満面の笑みを湛え記念撮影をしていた姿が印象的であった。日頃観光学を学ぶ学生が、海外旅行を兼ねて国際会議で論文を発表し、経験のない国際会議に参加するというこの企画は、学生にとって海外観光を始め多くのことを体験し実践できる場として、非常に有意義な企画である事を強く感じた。

また、韓国の学生との交流や文化体験も行われ、次代を担う学生たちにとって忘れられない交流となり、今後の大きな財産にもなったと感じた。来年も引き続き日中間学生交流も兼ねて、中国上海市での学生発表会を企画している大学もあり、観光学を通じた国際的な学生の交流の輪の広がりに期待したい。

（併設行事）

会議の初日の学術会議に合わせて、金泉市の観光葉書の原画展が開催された。最近、旅行先から葉書を出す習慣が少なくなっていることや、地元の伝統や習慣、風俗を伝える手段としての観光葉書の有効性を見直そうとの考えで、新しい観光用葉書が作成されたとのことであった。絵葉書には、韓国の地方の人々の暮らしや仕事、芸能、農村作業風景、農園などが生き生きと描かれていた。

作者は、これまでにも数回IFNATに参加している韓国大邱市の実業家であり画家のキム・オクジャ女史で、観光会議に花を添えていた。

また､会場内には会議テーマの「農村観光」に関連して、日本の大学教授の指導を受けて農村観光活動に取り組んでいる金泉市の農業グループによる農産加工品の展示と、名産のぶどうジュース、もちなどの加工食品の試食・試飲が行われ、農村観光の実践活動も紹介された。

最終日には、会議参加者の農村観光体験ツアーが企画され、金泉市の名刹である直指寺を参詣後、金泉市の特産品であるぶどう農園でのぶどう狩り、農村観光実践地であるシムシ村で韓国を代表する料理ビビンパ作りを体験し昼食をとった。

（会議を終えて）

2014年、IFNATは記念すべき第10回目を迎えるが、日本での開催に強い要望があり、検討されることになった。

今回の開催地である金泉市は、韓国政府が積極的に取り組んでいる観光分野の中でも、特に近年、農村観光の振興を打ち出しそのモデル地区として活動が盛んな地域であり、国を挙げての観光推進の意気込みを感じた。

また、韓国国内で、国際観光に関する人財育成が大学の観光学科で積極的かつ先進的に進められていることを、改めて実感した。

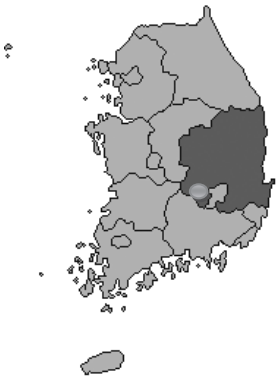
会議終了後、韓国組織委員会との間で、これまでのフォーラムの総括と会議の運営体制のあり方などについて意見が交わされた。特に、今回の会議開催までには国家間の問題が大きく影響し、予定されていた北京市での開催が中国側の事情により中止となり、急遽、韓国金泉市での開催に変更を余儀なくされた経緯があり、今後も、日中関係の大きな改善がなければ、中国側の参加による開催は難しいようだ。

このような環境下ではあるが、参加者間ではIFNATの継続開催の必要性が確認された。国際観光の発展と地域間交流の推進を掲げてきたIFNATも、今後は、議論から実行性のある会議として、参加各国間でウインウインの関係を構築するための会議として再構築する必要を感じた。そのためには、各国からより広域的な参加者の実現が求められており、その意味からも、来年予定されている第10回会議は新たな出発点となる。

会議に参加して、北東アジア地域における産官学民参加の国際観光会議として９回も継続開催されてきた「北東アジア国際観光フォーラム」（IFNAT）は、小規模の会議ながらも、今後も重要な役割を果たしてゆくだろうことを確信した。

参考

韓国慶尚北道金泉市の位置



開催地の金泉市(Gimcheon-si、キムチョン＝シ)は人口13万６千人、韓国東南部に位置する韓国慶尚北道に属し農工業地域。

特に園芸果樹のブドウの産地として知られている。

韓国新幹線のKTX駅（金泉亀尾駅）がある。

姉妹都市は石川県七尾市、中国四川省成都市。

（出所）　ウィキペディア

（写真１）日本国国土交通省代表　加藤貴広氏祝辞

（出所）筆者撮影

（写真２）IFNAT日本側参加者

（出所）筆者撮影

（写真３）矢野学氏の基調講演

（出所）筆者撮影